

知的障害特別支援学校の日常生活の指導における 学部間の一貫性・系統性に関する調査研究

岡部 龍彦

I 問題

日常生活の指導の目標や内容については、年齢及び発達段階が高くなるにつれて、年齢相応の別の中心課題に移行していくことが望ましいが、朝野（2011）は、学部段階に応じた目標設定や、指導が行われていない現状を示唆している。

名古屋（2012）は、日常生活の指導について、「キャリア教育の観点から捉え直すことが可能である」と述べており、朝野（2011）や金子（2012）も、発達全体の促進を目指す取り組みの基礎として、キャリア教育の観点から見直すと、日常生活の指導における小学部から高等部に至る支援の系統性が見えてくるのではないかと指摘している。

以上のことから、日常生活の指導の内容を、国立特別支援教育総合研究所（2010b）の知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」に基づき、キャリア教育の観点から検討することは、意義のある事だと考えた。

II 目的

知的障害特別支援学校の日常生活の指導について、各学部で重視されている内容を明らかにし、学部間の一貫性・系統性を検討することを目的とした。

III 方法

全国の小学部から高等部まで設置されている知的障害特別支援学校 296 校の、今年度日常生活の指導を行っている、各学部の普通学級担任を対象にした。田村（2011）のアンケート用紙及び、国立特別支援教育総合研究所（2010a）、国立特別支援教育総合研究所（2010b）、文部省（1994）を参考に質問項目を、①フェイスシート、②指導の時間、③内容の設定に関すること、④具体的な取り組み、⑤児童生徒の日常生活との関連、⑥指導の課題とし、調査用紙、依頼書、調査協力可否のはがきとともに校長あてに郵送した。「協力可能」

と返信があった学校に再度、調査用紙を郵送した。

IV 結果及び考察

1 回収率

調査は 2012 年 8 月下旬に行った。調査協力可否の回答は 296 校中 181 校からあり、「協力可能」と回答した学校は 133 校であった。133 校の普通学級担任 1215 名に質問紙を配布し、895 名（回収率 73.7%）から回答があった。回答に不備のあった 18 名を除き、877 名を有効回答とした。

2 日常生活の指導の時間

日常生活の指導の時間は、全学部で、9 割以上が帯状の時間割を設定しており、教育活動の基礎であると考えられる。一日の指導時間について、小学部では「151 分以上」の 40.8%、中学部では「51~100 分未満」の 41.8%、高等部では「1~50 分未満」の 64.3%が、最も多い比率であることが明らかになった。学部が上がるにつれて、指導の時間が減っていく傾向が見られ、授業時数自体が少なくなっていくことが伺える。また、全学部で、7 割以上が時間割に設定されている以外で日常生活の指導を行っており、授業時数が少なくなっていく中学部や高等部においては、時間割の指導よりも、時間割に設定されている以外の指導の時間に比重を置いていることが明らかになった。

3 日常生活の指導の内容の設定に関すること

学校の教育目標・学部の目標、個別の指導計画・個別の教育支援計画については、全学部において、8 割以上の人々が参考にしたり、活用したりしていることが明らかになったが、個別の指導計画を「活用している」と回答した人が、小学部 85.8%、中学部 83.2%、高等部 74.0%であったのに対し、個別の教育支援計画を「活用している」と回答した人は、小学部 59.5%、中学部 67.9%、高等部 50.2%という結果となり、個別の教育支援計画の一層の活用が今後の課題であると言える。

4 日常生活の指導の具体的な取り組み

日常生活の指導における学部間の一貫性・系統性については、日常生活の指導の具体的な取り組みに対して、「衣服の着脱」、「排泄」、「手洗い・洗面」の3つの指導の、「挨拶・清潔・身だしなみ」、「社会資源の活用とマナー」、「習慣形成」、「自己選択」の4つの内容について、「援助が必要な児童生徒」（以下、「要援助」）、「どちらかというと援助が必要な児童生徒」（以下、「少援助」）「どちらかというと援助が必要でない・援助が必要でない児童生徒」（以下、「援助不要」）の3つの児童生徒の実態ごとに結果をまとめた。本稿では、特徴的な差が見られた内容のうち、「要援助」と「援助不要」の結果を抜き出した。各図の①は小学部、②は中学部、③は高等部段階において育てたい力を表している。

図1の、「衣服の着脱」の「挨拶・清潔・身だしなみ」の内容については、「要援助」の児童生徒に対しては、全学部で、小学部段階において育てたい力に「比重を置いている」という回答が最も多く、学部間の一貫性・系統性が不十分であると言える。しかし、中学部・高等部で二番目に「比

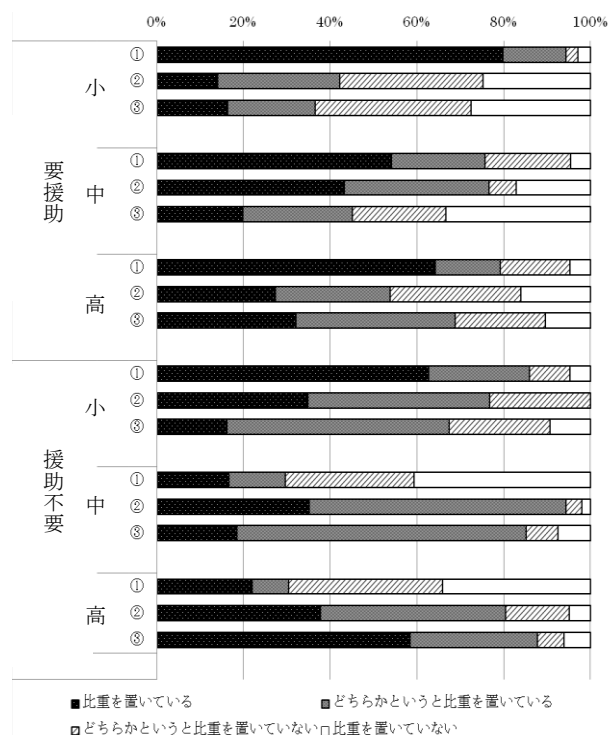


図1 衣服の着脱に関する指導の、「挨拶・清潔・身だしなみ」の内容における、児童生徒別の、学部ごとの質問項目の比較

重を置いている」という回答が多かったのは、当該学部において育てたい力であり、ある程度生活年齢を踏まえた対応が意識されていると考えられる。「援助不要」の児童生徒に対しては、全学部で、当該学部において育てたい力に「比重を置いている」という回答が最も多く、学部間の一貫性・系統性が保たれていると言える。

図2の、「排泄」の「自己選択」の内容についても、「要援助」の児童生徒に対しては、全学部で、小学部段階において育てたい力に「比重を置いている」という回答が最も多く、学部間の一貫性・系統性が不十分であると言える。「援助不要」の児童生徒に対しては、全学部で、当該学部において育てたい力に「比重を置いている」という回答が最も多く、学部間の一貫性・系統性が保たれていると言える。また、「援助不要」の児童生徒においては、小学部段階において育てたい力に最も比重を置いていたのは、高等部であることが明らかになった。この結果については、名古屋（2012）が「卒業後の社会生活がよりリアルにイメージできるため、これまで培ってきた日常生活の諸活動を首尾よく遂行する能力を検証し、ブラッシュアップ

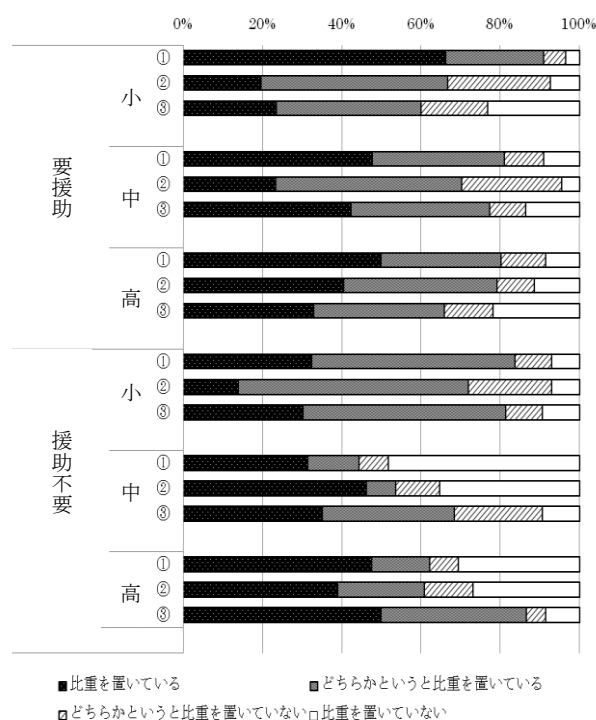


図2 排泄に関する指導の、「自己選択」の内容における、児童生徒別の、学部ごとの質問項目の比較

ブしていくことが大切な時期である」と述べていることから、高等部でも、小学部段階において育てたい力に比重が置かれているのだと考えられる。

図3の、「手洗い・洗面」の「自己選択」の内容については、「要援助」の児童生徒に対しては、全学部で、小学部段階において育てたい力に「比重を置いている」という回答が最も多く、また、同じ「自己選択」の内容でも、「排泄」に比べて、全学部で、中学部・高等部段階において育てたい力に、「比重を置いている」という回答が少ないことが明らかになった。この結果については、「排泄」の確立が基本的な生活習慣の中でも、重要視されているからだと考えられる。「援助不要」の児童生徒に対しては、全学部で、当該学部において育てたい力に「比重を置いている」という回答が最も多く、学部間の一貫性・系統性が保たれていると言える。

全体を通じて、学部間の一貫性・系統性があつた取り組みは、全てが「援助不要」の児童生徒に対するものであつた。また、「要援助」の児童生徒については、「習慣形成」以外の9つにおいて、全学部で、小学部段階において育てたい力に「比

重を置いている」という回答が最も多く、児童生徒の実態によっては、学部間の一貫性・系統性を保つことが難しいと考えられる。児童生徒の実態を考慮しつつも、生活年齢を踏まえた対応を意識していくことが、今後の課題であると言える。

5 日常生活の指導と児童生徒の生活との関連

日常生活の指導で学んだことについては、全ての学部で、「児童生徒の日常生活に反映されていると思うか」に対して「やや反映されていると思う」が小学部 51.7%、中学部 50.7%、高等部 51.9%、「反映状況を把握しているか」に対しても「やや把握している」という回答が小学部 65.4%、中学部 78.7%、高等部 63.2%で、最も多い比率であることが明らかになった。また、反映状況を把握する方法については、「保護者との会話を通して」という回答が小学部 77.5%、「保護者との連絡帳を通して」が、中学部 87.0%、高等部 75.8%で、最も多い比率となり、今後、児童生徒の日常生活との関連を強めていくためには、保護者との連携が不可欠であると考えられる。

6 日常生活の指導の課題

日常生活の指導の課題について、「家庭との協力が難しい」と回答した人が小学部 32.9%、中学部 33.2%、高等部では「個別化と集団化のバランスを図ることが難しい」という回答が 33.6%で最も多い結果となり、保護者との連携の重要性と、高等部では、日常生活の指導の時数が少なくなること、小学部や中学部とは異なる課題があることが伺えた。

文献

- 朝野浩（2011）領域・教科を合わせた指導～日常生活の指導～（知的障害教育の授業づくり）．特別支援教育研究，644，32-35.
- 金子健（2012）第11分科会 日常生活の指導 生きる力を育む日常生活の指導．特別支援教育研究，654，20.
- 国立特別支援教育総合研究所（2010a）本試案及び観点解説の活用にあたっての留意事項．
- 国立特別支援教育総合研究所（2010b）知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」．
- 文部省（1994）日常生活の指導の手引（改訂版）．
- 名古屋恒彦（2012）特別支援教育 青年期を支える「日常生活の指導」Q&A．東洋館出版社．
- 田村典子（2011）特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究-領域・教科を合わせた指導の実態調査に基づく授業づくりのための資料作成を通して-．岩手県立総合教育センター．

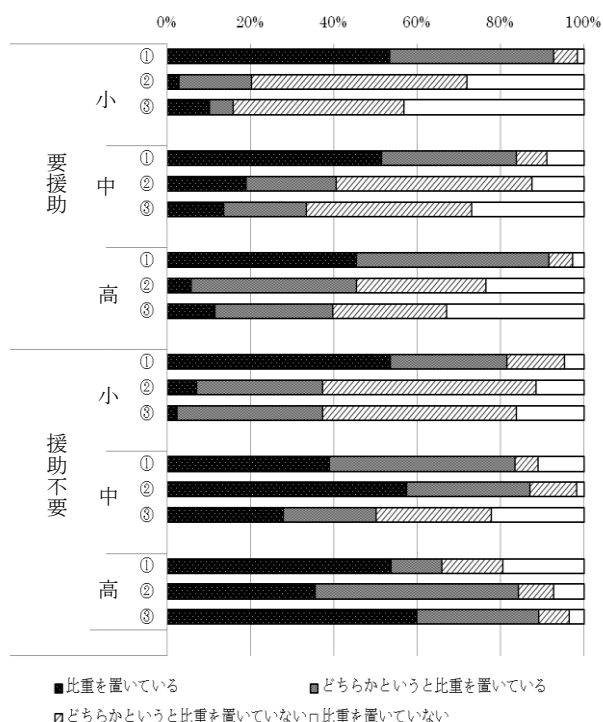


図3 手洗い・洗面に関する指導の、「自己選択」の内容における、児童生徒別の、学部ごとの質問項目の比較